

# これから

昨年10月、岩手県を舞台に開かれた第71回国民体育大会、第16回全国障害者スポーツ大会で、上位入賞した本市選手たちの挑戦に迫る。



# 及川優花

国民体育大会  
陸上競技少年女子B  
100mハードル第2位

**「優**勝できなくてとても悔しいです。年下の子に負けたくなかったので」と唇をかんだ。

陸上競技は10月7から11日まで、北上市の北上総合運動公園陸上競技場で開かれ、及川は少年女子B（中学生と高校1年生）100mハードルで2位に入賞した。

高1での競技目標は「インターハイ出場」と「自己ベストを出しての国体優勝」。昨年の国体では、自己ベストを出しながらも準決勝敗退。それから1年、苦しい練習とインターハイでの経験を経て、優勝に向けての手応えを感じていた。

予選ではさっそく結果を出す。苦手のスタートをうまく決めると、ハードル間もリズム良く走り抜け、自己ベストの13秒91で1位通過。「体が軽く、ベストが出そうだと感じていました」と調子の良さをうかがわせた。

**「準**決勝は圧巻の走りだった。追いつき出す。及川はこのレースを「今までに感じたことのない感覚でした。体がどんどん前に進んで気持ちよかったです」と振り返る。柴田高陸上部の花沢元監督も「大舞台で、自分の速度域以上の走りを体感できたのは貴重な体験。今後の成長にあの感覚は絶対必要」と話した。

及川は本番で過度に緊張しないよう、練習と思ってレースに臨むこと

を心掛けている。インターハイで過度に緊張した経験を生かし、いつも通り力を発揮するためだ。気負うことなく、程よい緊張感を持って迎えた決勝。自己ベストの更新、これまでにない速度域の体験などで、心身に充実してスタートラインに付いた。

**「ス**タートは少し出遅れたが、進行方向に重心を移動できた。ハードル間はリズム良く走れた。5台目に降、急速に追い上げたが、わずかに届かず13秒93で2位。1位とは100分の4秒とわずかの差だった。「スタートのミスが響きました。優勝できず、自己ベストも出せませんでした」と悔しがるが、家族や花沢監督は「全国2位はすごいこと。よくやった」と心から及川を褒めた。

中3時、及川は市内の高校で陸上を続けるつもりでいたが、全国大会での活躍を目にした複数の高校から声がかかった。その一つが柴田高だった。

花沢監督は「現在、日本女子が世界で競っていない。自らの手で五輪選手を育てたいと考えていた。及川は、身体能力、技術、性格、全てに惚れました。お父さんの指導が的確で、ハードルを跳ぶ技術はまともだった。スタートや体力面はまだだが、その伸びしろに無限の可能性を感じた」とスカウトのいきさつを話す。

花沢監督自身、現役時代はオリンピック出場直前まで行った選手。「一

流選手だった花沢監督の下でなら、自分ももっと成長できる」。及川は、親元を離れることを決意した。

**「柴**田高陸上部では、部員一人一人全員が目標と緊張感を持って練習に取り組んでいる。「やらされる練習ではなく、自ら取り組む」で日々鍛錬する雰囲気が好きだと及川は話す。

花沢監督は本年度の及川は「インターハイに出場できれば上出来」と考えていた。彼女に限らず、柴田高陸上部の育成は3年計画。3年生でいかに活躍できるかを逆算して指導している。本年度はインターハイ優勝に向けて、経験を積む年と考えていた。練習も、ハードル選手に一番大切な「体を無駄なく100メートル移動させる」が出来るよう基礎を徹底した。基礎の徹底で国体2位。周囲にはうれしい誤算だった。

**「こ**れだけの実力を持つ選手。インターハイ優勝や日本記録樹立を目指してもおかしくないが、及川の目標設定は控えめだ。しっかりと考え、背伸びしてようやく届くところに設定する。しかし、自分で決めた目標だからこそ、達成できない時には本気で悔しがるのだ。

来年度は「インターハイで決勝に進出すること」を目標にしている。常に周囲の予想を上回る結果を残してきた及川。目標の少し先にある「表彰台」に立つ姿を期待せずにはいられない。

## Oikawa Yuka

2000年4月22日、中田町本町畑中生まれ。柴田高1年。加賀野小時代、全国小学生陸上競技交流大会に出場したことをきっかけに、中田中進学後、陸上部へ入部。入部後は100mなどで活躍したが、中2途中からハードルに転向。中3時には全中4位入賞を果たす。身長161cm。父、母、兄2人、姉の6人家族。好きな陸上選手は山縣亮太。趣味は音楽鑑賞で、好きな歌手は「AAA（トリプルエー）」。